



田無神社

第35号

睦月

発行所
田無神社社務所

〒188-0011
東京都西東京市田無町3-7-4
TEL 042-461-4442

編集発行人
賀陽智之

大晦日大祓式

令和4年12月31日(土) 午後3時齋行

12月31日(土) 午後3時から田無神社境内において「大晦日の大祓式」を齋行いたします。普段暮らしている土地の神様に対して、無事に過ごせていることへの感謝をお伝えし、半年間の罪と穢れを祓い落とします。

※ご予約は必要ございません。どなた様でもご参列できます。

「大晦日大祓式」とは

大祓式は伊弉諾神の禊祓いを起源とし、宮中においても、古くからおこなわれてきました。中世以降、各神社で年中行事の一つとして普及し、現在では多くの神社の恒例式となっています。

年に二度おこなわれ、六月の大祓を夏越の祓と呼びます。十二月の大祓は年越の祓とも呼ばれ、新たな年を迎えるために心身を清める祓いです。

私たちが日常生活で知らず知らずのうちににおかした罪穢れや穢れ(ちがひ)を一年の半分にあたる12月31日に形代(人形)に移して祓い除き、身も心も清々しく健康で幸せな生活を願います。

「形代(人形)の配布」

形代(人形)に氏名(ふりがな)・生年月日をご記入のうえ、ご自分の身体を撫で清め、息を3度

ふきかけます。形代(人形)入れの袋にご住所お名前をご記入のうえ、社務所までお持ち下さい。形代(人形)は、12月31日(土) 午後3時より行われる祭典において、浄火にてお焚き上げします。形代(人形)は社務所にて12月1日(木)より無料頒布しております。

※形代(人形)は郵送でもお受けします。



切り絵作家 小出 菟先生 作

田無神社年末年始新型コロナウイルス対策

新型コロナウイルスに罹患された皆様と感染拡大により生活に影響を受けられている地域の皆様にご心よりお見舞いを申し上げます。田無神社では、クラスター感染を防ぐために、感染の防止策を講じていきます。参拝者の皆様の健康・安全面を第一に考慮して検討してまいりますので、ご理解をいただきますようお願い申し上げます。

境内における感染を予防する為の具体的な対策

(1) 分散参拝

「ゆとりをもった」ご参拝を」

例年、田無神社では、正月三日に10万人の参拝者が訪れ、境内に続く表参道は長い行列ができません。三が日の混雑を避けるため、1月1日(元日)と2月2日(節分前日)までを初詣の期間と捉えていただき、人出が集中しないようゆとりをもった分散参拝にご協力いただきたくお願い申し上げます。

(2) 祈禱

「ご祈禱は境内で密を避ける」

コロナウイルス感染症対策とし

て、1月1日(日)から2月5日(日)の期間、境内にトラスステンを設置します。108平方メートルの大型テントには最大60人が距離(ソーシャルディスタンス)を保つて入ることができます。換気しながら、密を避け参拝者相互の距離をとって新年祈禱をご齎行いたしますので、安心してご参りください。万一、感染者が発生した場合に備え、個人情報取り扱いに十分注意し、参拝者の受付表を適切に管理いたします。

(3) 手水と鈴緒

「不特定多数の接触を避ける」

- (a) 当面の間、手水の柄杓を撤去します。手水鉢の流水に手をさしのべ、直接水をお受けください。
- (b) 拝殿手前に設置されていた鈴緒を撤去し、一時的に使用を停止します。
- (c) 複数の人の手が触れる箇所や物品を定期的に消毒します。

(4) 破魔矢・授与品

「縁起物は12月から頒布開始」

(a) 分散参拝の観点から、破魔矢などの縁起物を令和4年12月1日

- (木) より頒布いたします。
- (b) 受付や授与所に透明ビニールカーテンを設置し、飛沫感染を予防します。

(5) ご祈禱を受けるにあたって

初詣にあたり、次の症状がある場合、又は感染者との濃厚接触が6日以内にあつた方は、ご参拝をご遠慮いただきますようお願いいたします。

- ・ のどが痛い
- ・ 咳や痰どちらか、または両方である
- ・ 鼻水がでる(鼻づまりがある)
- ・ 匂や味がわからない
- ・ からだがだるい(からだがおもい)
- ・ 発熱(37.5℃以上)



感染症に関わる健康チェック



臨時祈禱殿

- ・ 息苦しさがある(いつもとちがう苦しさ)
- ・ 一緒に住んでいる家族に熱やだるさなどで具合の悪い人がいる

令和5年新春特別祈願

田無神社では「厄除開運・家内安全・健康長寿・合格祈願・社運隆昌・商売繁盛・五龍神方位除」等の新春特別祈願を執り行います。年の初めの一番祈願に本年の願いを込めてご祈禱をお受けください。

1) 祈禱時間の案内

1月1日(土)
 (夜間) 午前0時から午前2時
 (昼間) 午前9時から午後5時
 1月2日(月)～1月5日(木)
 午前9時から午後5時
 1月6日(金) 以降
 午前9時から午後4時

令和5年
 「一楽萬開札」頒布開始

令和4年11月23日から令和5年2月3日の期間に田無神社一番札「一楽萬開札」を授与します。その年の吉方(令和5年は南)にお祀り下さい

節分祭

新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け、参拝者の健康・安全面を考慮した結果、2月3日(金)に行われる予定であった節分祭の豆打ちを中止することにいたしました。参拝者の皆様

の健康・安全面を第一に考慮してまいりますので、ご理解をいただきますようお願い申し上げます。
 ※年男・年女の厄除け祈禱は通常通り承ります



五龍神方位除

本年が運氣低迷の年に当たる方の生まれ年

令和5年

(男女共通)



四 緑	七 赤	九 紫
中央(八方塞り)	北東(鬼門)	北
昭和 8年	昭和 14年	昭和 12年
昭和 17年	昭和 23年	昭和 21年
昭和 26年	昭和 32年	昭和 30年
昭和 35年	昭和 41年	昭和 39年
昭和 44年	昭和 50年	昭和 48年
昭和 53年	昭和 59年	昭和 57年
昭和 62年	平成 5年	平成 3年
平成 8年	平成 14年	平成 12年
平成 17年	平成 23年	平成 21年

八方塞り 鬼門 北

令和5年 五龍神方位除け早見表

厄 除

令和5年

男性

女性

年齢は数え年

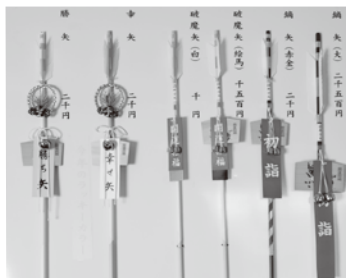
前厄	本厄	後厄	前厄	本厄	後厄
平成 12年 24歳 年生	平成 11年 25歳 年生	平成 10年 26歳 年生	平成 18年 18歳 年生	平成 17年 19歳 年生	平成 16年 20歳 年生
昭和 58年 41歳 年生	昭和 57年 42歳 年生	昭和 56年 43歳 年生	平成 4年 32歳 年生	平成 3年 33歳 年生	平成 2年 34歳 年生
昭和 39年 60歳 年生	昭和 38年 61歳 年生	昭和 37年 62歳 年生	昭和 63年 36歳 年生	昭和 62年 37歳 年生	昭和 61年 38歳 年生
			昭和 39年 60歳 年生	昭和 38年 61歳 年生	昭和 37年 62歳 年生

厄年は古来より災難が多く、行動を忌み慎む年とされてきました。精神的・肉体的にも変動を来す時期であり、社会的にも転機の時期で、大事な節目の年でもあります。

令和5年 厄除け早見表(年齢は数え年)

ご祈禱の初穂料と授与品

初穂料	授与品
五千円	八寸お札、絵馬、お守り、祈り箸(初宮参りは歯固め石)
一万円	一尺二寸お札、五龍神御幣、絵馬、お守り、祈り箸(初宮参りは歯固め石)
二万円以上	一尺五寸お札、五龍神御幣、お神酒(2月～11月)、絵馬、お守り、祈り箸(初宮参りは歯固め石)



正月破魔矢



一楽萬開札

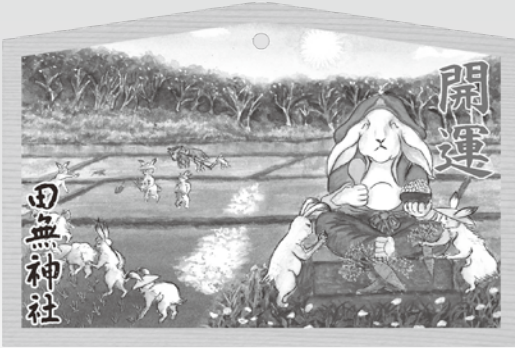
第6回田無神社
干支絵馬
デザインコンテスト
結果発表

西東京市をはじめ全国の皆さまから数多くの作品（応募総数117作品）が寄せられました。その作品を令和4年9月13日（火）に漫画家クロマツテツロウ氏、切絵作家小出菟氏による選考委員会にて厳正な審査を行い入賞4名、入賞者4名を選出いたしました。入賞者4名の作品を令和5年（2023年）田無神社絵馬デザインとして採用し、お正月の前後に絵馬として奉製（4体合計4800体）いたします。

展示会

(1) 令和4年10月3日（月）13時から10月7日（金）17時までの間、アスタ2階センターコートにて田無神社絵馬デザインコンテスト入賞作品ならびに入選作品の展示会を行いました。

(2) 令和5年1月1日（日）から1月9日（月）までの間、田無神社境内に入賞作品4作品を展示します。



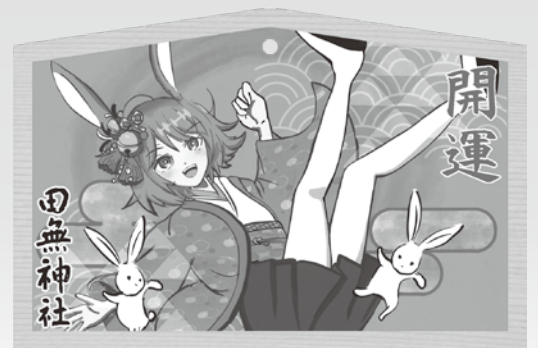
金賞 クロマツテツロウ賞
中蘭 有世様



大賞
榎戸 朋美様



J:COM賞
佐藤 快星様



金賞 小出 菟賞
栗林 陽光様

神社 de 献血

会場では【検温・手指消毒・マスク着用】をお願いしています。ご来場をお待ちしております。



田無神社



開催日
1月4日(水) ▶ 5日(木)

受付時間
11:00~15:30

★web予約がおすすめです★
会員専用サイト【ラブラッド】
簡単な会員登録 → 前日17時までに予約
予約特典あり!! (受付優先案内、記念品)



オリジナル記念スタンプ

神社de献血オリジナルスタンプ帳差し上げます



16歳から最長69歳まで

65歳以上の方の献血については、60~64歳の間に献血経験がある方に限ります。

- 高血圧・コレステロール
- アレルギー(花粉症など)
- 尿酸値
- 漢方
- サプリ
- ぜんそく(予防)
- 低用量ピル

服薬
しても
ほとんどの方が
献血OK

主催：一般財団法人国際災害対策支援機構 協賛：田無神社
協力：西東京市献血推進協議会 西東京青年会議所 田無神社氏子青年部



令和4年12月刊行

御遷座三五〇年大祭記念誌

「写真と資料から見る

田無神社」

御遷座三五〇年を祝し、神社の歩みを写真と資料で辿る記念誌を令和4年12月に発行します。田無神社の倉庫に眠っていた古写真など約1,000点を掲載。特別寄稿として第2章「田無の歴史と下田半兵衛」で近辻喜一氏が「田無の歴史」を、行田健晃氏が「下田半兵衛」を、第6章「境内の石造物」で廣瀬裕之氏が「供養塔」・「石盥銘」・「本殿基壇銘」・「將軍山碑」についてそれぞれ解説されています。

御遷座三五〇年大祭記念誌 刊行にあたって

田無神社 宮司 賀陽智之

御遷座三五〇年大祭は、令和2年(2020)10月11日に総代・世話人参列のもと斎行され、目出度く納められた。新型コロナウイルスの感染が拡大している状況下であったが、社殿内で執り行われる祭典は感染の防止策を講じた上で、滞りなく行われた。前日からの大雨は祭典の数時間前まで降り続き、生きとし生け

るものすべてに恵みをもたらす大神様の限らない御神徳を改めて感じさせられた。御祭神の御神威が益々御発揚されるとともに、大神様の御加護のもと皆様が御健勝であることを心から祈念する。御遷座三五〇年を迎えたこと、氏子・崇敬者の皆様と共にこの喜びを分かちあいたい。

さて、この御遷座三五〇年大祭記念誌は、令和2年(2020)12月に発行される予定であったが、新型コロナウイルス感染症の全国的な感染拡大を受け、令和3年(2021)に発刊が延期された。そ

の後も、企画の広がりや予算面の手当の必要から、遅々として進まず、難航した。しかしながら、令和3年(2021)5月下旬から6月中旬に行われた倉庫内の資料・写真の調査、宝物庫の調査、

書庫の調査により誌面構成の効率が向上し、発刊に向けて大きく前進することができた。その後、出版社、編集者の変更はあったものの、新旧編集者等の献身的な御支援により乗り越えることができ、今回の出版を迎えることができた。

どんな書物も大勢の人々が関わっていることが常であるが、本書も例外ではなく、多くの人の支えにより出版までこぎつけることができた。記念誌編纂にあたり、第2章の項目を御寄稿下さった近辻喜一先生、行田健晃先生に心から感謝申し上げたい。近辻先生は、中世から明治期までの田無の歴史を網羅的に解説いただき、行田先生は名主「下田半兵衛」に焦点を当て、学術的にまとめられた。神社の歴史だけでなく、田無の歴史、下田家の歴史を重層的に俯瞰することで、広い視野で田無神社を理解することが可能となった。さらに、田無の歴史を知ること、郷土を愛する心が育まれるのではないだろうか。この地の発展の礎を

担った先人の足跡を辿る手がかりとしても、多くの方々が本書を手にかかると期待したい。

第6章「田無神社の碑刻銘文選」の項目は武蔵野大学教育学部廣瀬裕之(舟雲)教授が「供養塔」・「石盥銘」・「本殿基壇銘」・「將軍山碑」についてまとめた。御多忙にもかかわらず、本書発刊のために多くの時間を割いていただいたことに改めて感謝申し上げます次第である。廣瀬教授の執筆がなければ、田無神社の石盥、將軍山碑等が目の見ることはなかっただろう。御寄稿により、石造物の文化財としての側面が再評価され、その価値が高まったものと確信している。

本書の校閲や古い資料の整理に尽力した田無神社権禰宜福島康夫をはじめすべての田無神社職員にも心から感謝申し上げます。

本書執筆にあたり、現在と過去の記録を繋ぎ合わせることに困難さに直面した。神社として記念誌の編纂に取り組むのは今回が初めてであり、手探りの状態から始まった。往時の記録が思うように揃わない中、限られた時間で執筆することは決して容易ではなかった。特に、古い写真や資料の収集に苦慮した。それらは戦時中に一部を除いて紛失しており、また、現在、

戦前の田無神社についてご存知の方もほとんどいない。さらに、戦前に撮影された写真も、氏子・崇敬者のほとんどがお持ちではなかった。本書は神社に残る数少ない貴重な写真・資料を掘り下げて解読し、組み立て構成した。写真や資料に解説文を入れてあるので、神道の知識がなくても読みやすい内容になっていると自負している。本書を通じて氏子・崇敬者の皆様が田無神社をより身近に感じただければ幸いである。また、神職や巫女、筆耕などの田無神社職員にとつて本書が田無神社を正確に理解するためのテキストのような存在ともなることを期待する。内容については総力を挙げて編纂に取り組み、万全を期したつもりではあるが、書き足りぬ点、調査を尽くしきれない点も多々あるので、何卒ご容赦いただきたい。

倉庫環境の改善と資料整理

平成25年(2013)3月30日、先代宮司賀陽濟は59歳の若さでこの世を去った。神明奉仕を通して、賀陽濟は多くのことを田無神社に残した。私が子供の頃の田無神社といえば、社務所こそあるが授与所を開けるのは忙繁期だけ。他の時期は閉まったままの開かずの神社であった。7万人が住む田無の氏神社としては設備や施設が物足りず、十分に社務をこなせなかつた。こういう状況を打開するために大規模な境内整備が必要であった。敷石を並べ、授与所や御手洗い所を作り、立体駐車場を併設した。また、空間を広げるために境内に手を加え、移設工事などの大きな工事に取り組んだ。境内を美しい草木が囲み、待合殿や第二の授与所と神輿庫が建設された。さらには大鵬土俵が建立され、田無神社は開かれた神社へと変貌をとげた。今から思えば、医師として診療や研究に従事し、医学博士として教鞭をとる中でこれだけ多くの成果をあげられたことに驚かされる。

私は平成25年(2013)5月に27歳で田無神社の宮司の職を仰せつかった。当時の私にとつて田無神社の歴史を探ることが最も困難を感じることであった。なぜなら田無神社の歴史、過去を語るまとまった資料が存在しておらず、散在する書類から歴史を紐解き、神社が歩んできた軌跡を推察しなければならなかつたからだ。その当時から、神社全体を適切に管理運営するには、史実に裏打ちされた正確な知識が必要であり、そのためには、倉庫整理を行い、資料集を作り、頭を整理する必要があると認識していた。

開かれた神社

令和3年(2021)の大規模な資料調査で、倉庫を整理整頓し資料の再収納を行った。倉庫や倉庫のようなものが複数存在し、さまざまなものが雑然と置かれ、埃をかぶった資料や本が整理されずに堆積まわっていた。社務所地下倉庫2室にカビ発生を防ぐための空調の取り付け工事を実施し、倉庫環境の改善を図った。田無神社の倉庫にある資料や写真は地域にとつても宝である。これからも大切に保存し、後世に引き継いで参りたい。そして、今後は原本となる資料を電子化して、データベース上で閲覧できるよう推し進めていきたい。

この活動の中で本書編纂のやりがいと倉庫整理の手応えを実感した瞬間がある。倉庫の整理中にある青年が神社を訪れた。彼の祖父は土俵作りの職人で、大鵬土俵の設置工事にも携わったとのことである。「祖父の写真が残っていたら見せて欲しい」と言う彼に、倉庫内の整頓されたばかりの本棚からサツとお目当ての写真を渡すことができたのである。

戦後最多の145万人。この数字は日本で令和3年(2021)に亡くなった方の人数だ。1日に約4千人が亡くなっていることになる。令和7年(2025)には、団塊の世代が全員後期高齢者となる。日本は世界に類をみないほど高齢化が進んだ国であり、これから「多死社会」へと突入する。日々、これだけ多くの方が亡くなっているのに、日本人にとつて死は日常であるはずなのに、現代では特別なことと捉えられているように感じてしまう。私が生まれるより前、かつての大家族の中では死は常に身近に存在していたそうだ。年長者が家族に見守られながら家で逝き、看取られる。その姿を幼い頃から日常の中の出来事として目にしていた。しかし、今日の核家族化の中では、死は遠い場所ですら発生する。その場所も病院のベッドの上がほとんどとなった。死について考えることは「今をどう生きるか」につながる前向きな行動である。生と死との距離感の変化が生じた現在であっても、死を迎えるにあたって命と向き合い、命を語り合う姿勢を持ち合わせたい。

028)をピークに人口が減少する時代となった。高齢者が多くを占め過疎状態になる地域は日本各地に点在し、もはや打つ手のない状況にまで追い詰められている。人口減少と高齢化が地域経済を縮小させ、悪循環を加速させている。過疎地帯に鎮座する小規模神社では、存続が危ぶまれる状況にある。古来より、神社の祭祀を通して地域の連帯感、一体感が育まれてきた。日本人が潜在的に持つ祭りという概念は、地域経済の縮小や高齢化による地縁的な繋がりの希薄化から徐々に失われつつある。人口が減り氏子組織が崩壊することで、村や町の祭りが衰退し、伝統行事が途絶えてしまう恐れがある。田無神社を含む多摩地域の神社ですら後継者不足などの問題を抱えており、神社を取り巻く状況は全国的に厳しいと言える。さらに、戦後の家族制度の変化、特に核家族化の進行によって、親から子へ、子から孫へと連綿と伝えられてきた「しきたり」や「習わし」の伝承方式が崩れ、途絶えてしまった伝統文化も多い。それゆえ、これからの神社にとって、人と人、人と社会を「結ぶ・紡ぐ」ということは極めて重要なテーマとなっていくものと推察される。

コロナの感染が国内で始めて確認されてから3年余りが過ぎた。令和2年(2020)、令和3年(2021)に生まれた女の子には「結」、「紡」の字の入る名前が多かった。この傾向は東日本大震災が発生した平成23年(2011)にも顕著に現れたそうだ。お父さん、お母さんは、混沌とした時代になると、子供の将来を案じて子供に「つながる」という意味を含む「結」、「紡」という漢字をつけるのであろう。感染リスクを低減させる行動をとりながらも、コロナによって分断されてしまった人と人、人と地域の縁を結び、つながりや絆を紡ぐ心を大切に持ち続けたい。

メディア環境が日々進化する情報過多社会で、情報発信の手法は大きく変化しつつある。新聞や雑誌、テレビ等の既存のメディアは単方向的な情報伝達であったが、オンラインメディアは双方向的な情報伝達が可能である。情報はインターネットの登場により「発信するもの」あるいは「受け取るもの」という一方通行の固定された役割から脱皮した。現に、神社に対する参拝者の評価はWeb上で簡単に書き込みできる時代である。神社の許可なく勝手にGoogleマ

ップに掲載され、頼みもしてないのにインターネット上で不特定多数の人々が五段階評価で星マークを付けられる。Web上の評価は実際に参拝者が神社に訪れるかどうかの意思決定の材料になる反面、名誉毀損や侮辱、プライバシー権侵害等の書き込みの恐れがあるので、神社としても注視する必要がある。神社から一方的に情報を発信し続けるだけではなく、参拝者の意志や感情を積極的に収集する取り組みが必要な時代になったのだ。分かり合おうとする努力がますます重要になるこれからの時代において、神社に奉職する職員からは、参拝者との会話をより大切にしたい。対面コミュニケーションにおいてもWebメディアでも大切な「通じ合う想い」なのである。神社が持つ公共性を最大限に活用し、地域の一体性を育み、若者の郷土意識を高め、伝統精神を共有していきたい。

田無神社の二の鳥居には「開かれた神社」と書かれた看板が掲げられている。「開かれた神社」という言葉は、先代宮司の賀陽濟が約10年前に創ったとされる。直接この言葉の意味を先代宮司から教わったことはないが、二つの意味が潜んでいると信じている。一つは、地域の人々に親しまれ、氏子・崇敬者に寄り添った神社であるという意味だ。もう一つの意味は、参拝者にとって職員が親しみやすい存在になろうという心構えである。「開かれた神社」という言葉は参拝者へ向けたメッセージであり、職員へ向けたスローガンでもあるということだ。田無神社に奉職する神職や巫女、筆耕らにはこのスローガンのもと、氏子・崇敬者と心を響かせあい、互いに理解し、よい影響を与え合って、これからも成長していったほしい。郷土を愛し、誇りも持つ若者を増やしていくことで、これから否が応でも直面することとなる「多死社会」、歴史上前例のない「超高齢化社会」、歯止めがかからない「過疎化」を乗り越えたい。

ようこそ西東京市へ

都内の市区町村で観光協会の設立が進むなど、全国各地で観光産業振興の気運が高まっている。しかしながら、西東京市には観光事業の振興や誘致を担う「観光課」はないし、「観光協会」も存在しない。文化振興を語る上で、インバウンド観光は重要なキーワードの一つであるはずだ。現在は、新型コロナウイルス感染症の影響に

より、訪日外国人旅行者数は大きく減少している。今後、アフターコロナの反動や令和7年（2025）に開催予定の大阪・関西万博も見据え、旅行者数は徐々に増えていくだろう。地域の活性化を図るためには外国人需要は欠かせないし、他国からの人の呼び込みは地域の資源を再発見するきっかけになる。今後、西東京市には外国人観光者をもてなす取り組みが期待される。

観光課あるいはこれの機能を有する組織がないので、西東京市の魅力は、市外、他県の人々にも十分に伝わっていないのではなからうか。人を呼び込むことは、人口減少・少子高齢化が進む地域に活力を与える効果がある。田無神社本殿・拝殿は東京都指定文化財、田無神社参集殿は国登録有形文化財に登録されている。歴史のある建造物や街並みは、その時代の記憶を後世に引き継ぐ貴重な資源である。こうした資源を活用して、

観光地としての魅力を高め、先人から受け継いだ歴史や文化などの「西東京市の価値」を街作りの取り組みに活かして欲しい。情報通信技術が発展し、交流人口が拡大する現代にあつて、コミュニティの枠は大幅に拡大している。現代

社会においては、西東京市に興味関心を抱いてくれる全ての人々が「目に見えないコミュニティ」のメンバーと言うことができる。市民らに見逃されている観光資源をすぐに全国展開するのは困難であるが、これを再発見し、再評価、再構成することで徐々に視点を内から外へとシフトしていかなければならない。西東京市には、自然、文化、歴史など地域の資源を活かした、地域の活性化に繋がる街作りを期待したい。

日本文化は、あらためて言うまでもなく長い歴史と伝統に培われてきた。戦後我が国は、世界に類のない高度経済成長を遂げたが、ややもすると物質的繁栄にのみ目が奪われ、精神面の重要性への認識が希薄になる傾向が見受けられる。今日の日本は、飛躍的な発展を遂げ、国民の生活水準も著しく向上した反面、敬神崇祖の念は薄らぎ、若者は疎か中高年に至るまで偏向思想に侵されている。そのような中にあつて神職は、我が国の伝統、文化、郷土をしつかりと守り伝えるために、先祖から受け継いだ日本人の心を正しく後世に伝えなければならぬ。神社の祭礼を通して日本の伝統と文化を守り、国の歴史に誇りを持つ次世代

を育成する使命があることを忘れてはならない。緊迫した中国をはじめとする近隣諸国の情勢やロシアのウクライナへの軍事侵攻、目まぐるしく変化するコロナの報道を見る限り、改革の年が迫ってきている。それらに振り回されることなく、どっしりと構え時代の潮流に柔軟に対応していきたい。一つ一つの祭儀を大切に職員一丸となつて取り組み、氏子との交流を積極的に図り、「開かれた神社」を目指して参りたい。

『写真と資料で見る田無神社』
購入方法

本書の購入には、別添のチラシに記載されている①FAXによる申込み、②メールアドレスへの申込み、③神社授与所での頒布、の三方法があります。チラシをご確認いただきご都合のよろしい方法でお申し込みください。価格につきましても別添チラシをご参照ください。



写真と資料から見る
田無神社

御遷座三三〇年大祭記念誌

田無神社御遷座三五〇年記念誌 『写真と資料から見る田無神社』から

